

# 「食と農」の博物館 展示案内

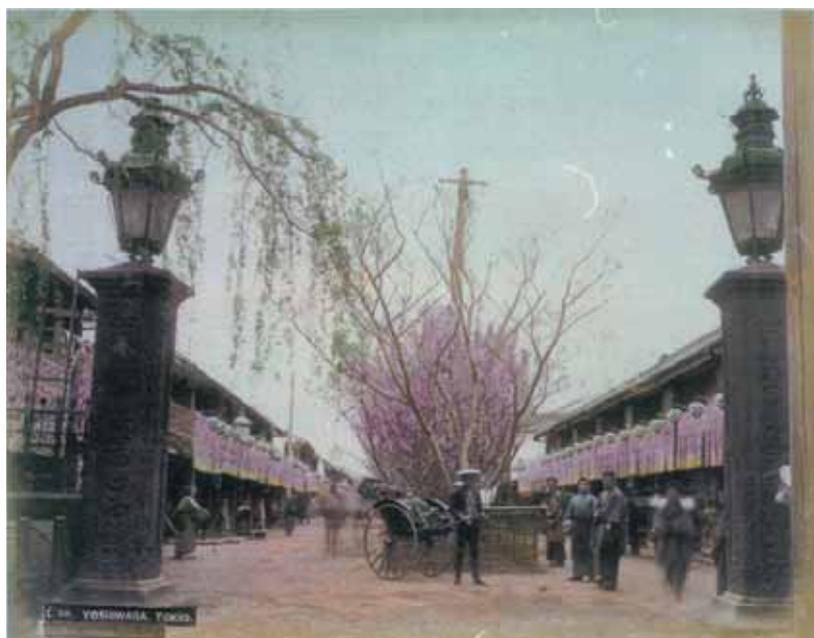
No.47  
東京農業大学「食と農」の博物館  
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28  
TEL.03-5477-4033 FAX.03-3439-6528

開館時間 午前10時～午後5時 (4月～11月)  
午前10時～午後4時30分 (12月～3月)  
休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は火曜)・毎月最終火曜日  
大学が定めた日(臨時休業がありますのでご注意ください)  
展示期間

2010.4.28～9.12

## 花ひらき、美しく舞う緑の「造園文化」 —江戸・明治に見るはじめて物語—

東京農業大学造園科学科／横浜開港資料館



明治期の吉原の桜並木（見た目ではコンテナ栽培樹木のサクラが設置されているとは解らない）横浜開港資料館所蔵

### 企画の趣(主)旨

温暖化やヒートアイランド対策として、また、都市の景観や快適性を高めるための切り札として、近年、急速に「都市緑化」に対する期待が大きくなってきました。その中心的役割を担っているのが「造園」です。

造園の源流をたどっていくと、単に庭づくりだけではなく、相当古くから花や緑によって人々の暮らしに潤いとやすらぎをもたらすことに、さまざまな場面で貢献してきました。しかしながら、これらの事実については、今までは、あまり知られていませんでした。

そこで、今回の企画におきましては、「温故知新」という言葉がありますが、花や緑に関して、あまり知られていない歴史的起源や事実、秘話を8つの事象(植木業、芝生、屋上庭園と室内庭園、街路樹、花壇、遊郭、勸工場、緑花の原点)に分けて、なるべく解り易く、ビジュアルに紹介させて頂き、脈々と受け継がれてきた造園の魅力の一端を多くの人に伝

えたいと考えました。

また、われわれ自身も改めて先人の知恵を学びとり、それを糧として今後の都市緑化、造園のデザインに生かしていきたいと考えております。

なお、今回の展示で、十分にわれわれが把握できなかった点につきましては今後も引き続き、調査・検証作業を行い、補完していきたいと考えております。本展示をご覧頂いた皆様からも今回の企画内容について忌憚のないご意見や関連情報をお寄せ頂ければ幸いです。

最後に、今回の企画の一環として、『花ひらき、美しく舞う緑の「造園文化」—江戸から平成を彩る環境芸技—』と題した講演会を東京農大オープンカレッジ(6/12、6/19、6/26開催)で企画致しました。そちらの方もぜひ聴講(有料)頂きたいと願っております。

企画：造園科学科造園地被学研究室・都市緑化技術研究室

後援：環境緑化新聞

## 江戸・明治の遊郭 花と緑のワンダーランド

代表格である江戸吉原の遊郭のメイン通りは、季節に応じて、さまざまな趣向を凝らした花や緑で飾られ、その光景を楽しむ老若男女が集い、まさに現代のテーマパークの様相が繰り広げられていました。

圧巻は何と言っても、春、木製の大きなコンテナに仕立てられたサクラが遠隔地にある植木屋から台八車によって運ばれ、並木状に設置され、1ヶ月間、花期の異なる種類を植え替え、花見に供していました。四角い箱状の鉢の周りにはナノハナなどを植え、竹垣をめぐらし、あたかも初めからサクラ並木がその場所にあったように工夫されていました。また、夜には、ぼんぼりでライトアップされ、夜桜も堪能できるように演出されていました。ただし、安政2(1855)年に長谷川雪堤の手になる錦絵「花街植桜樹」には吉原のメインストリートの仲の町通りにサクラを直植えている様子が描かれています。果して江戸・吉原のサクラはコンテナ栽培樹木の据置か、露地栽培樹木の直植えなのか、また、吉原の長い歴史の中で対応が異なっていたのか謎であり、大変興味深いところです。

春のサクラの後、初夏にはハナショウブ、秋にはキク、正月には松飾りというように、季節

に応じたしつらいが工夫されていました。これらに要する莫大な経費は遊郭に係わる事業者の共同出費によって賄われていました。その額は今のお金にして数千万円にのぼるという記録があります。

## 企業緑地や百貨店の屋上庭園の原点 『勸工場(かんこば)』

東京の新名所として、六本木にある「東京ミッドタウン」が注目されています。東京ミッドタウンの魅力は何といても、商業施設でありながら、その敷地の40%を占める緑地の存在です。このような空間は、国や自治体が提供する都市公園等の公共緑地に対して、企業緑地と呼ばれ、都心の貴重な憩いの場となっています。

実は、このような空間が既に明治初期に、わが国でつくられていました。それが『勸工場(かんこば)』と呼ばれる空間です。特に素晴らしいものが、明治11年に初の勸工場として開設された「辰之口勸工場」です。内国博覧会等で展示された商品を陳列販売するための施設として整備され、ロンドンのバザーやニューヨークのフェアに倣って、敷地内に遊園的機能を持たせ、集客力を増すことを意図しました。そこで整備されたのが広大な日本庭園や能楽堂です。

一時、隆盛を極めた勸工場も、現代風の商業



辰之口勸工場

施設である百貨店(デパート)の隆盛と共に次第に姿を消していきました。次々と建設された百貨店の屋上には競って立派な屋上庭園が整備され、遊園地的機能を持たせ、家族連れを集客することが常套手段のようになっていきました。

こうして見ていきますと、ある意味では勤工場の庭園は形を変え、百貨店の屋上庭園に進化したとも言えなくもありません。

## 屋上庭園、室内庭園 はじめてものがたり

今、世界中で都市緑化の主角として、建築物の屋上や室内空間の緑化が大きな注目を集めています。

わが国においても屋上や室内の緑化の事始めは意外と古く、屋上庭園については既に幕末の時代に、室内庭園についても明治中期に壮大なものが作られていたことが、われわれの調査で明らかとなりました。

### 最古の屋上庭園

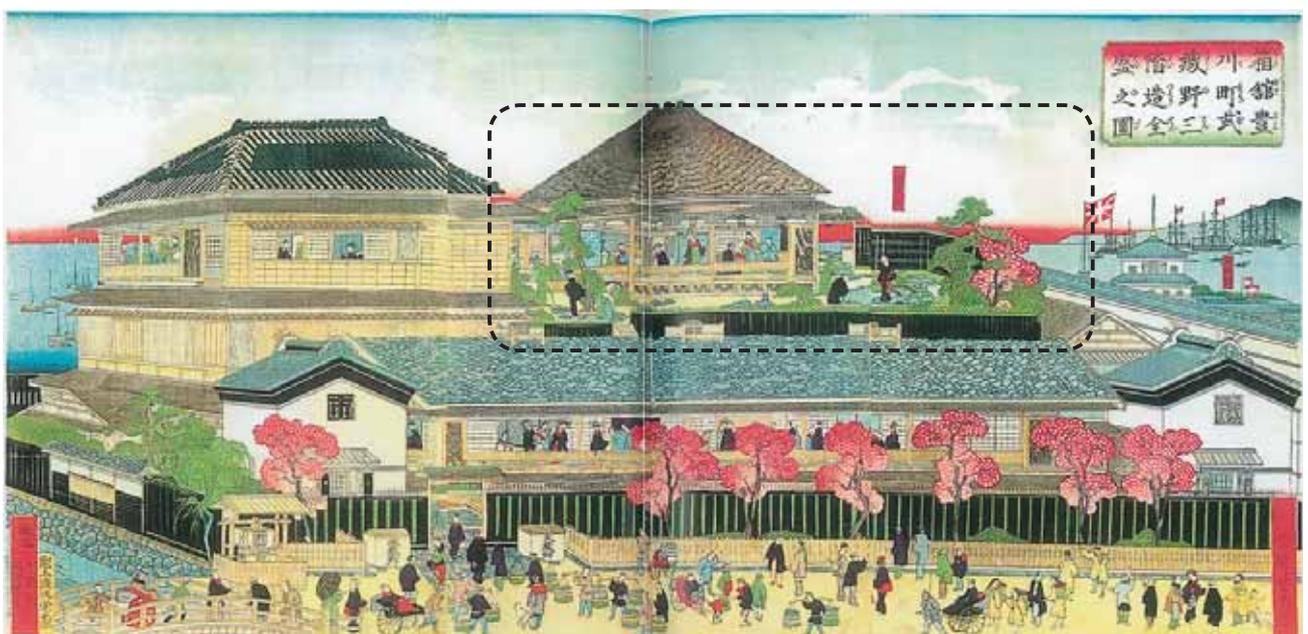
屋上庭園については、今から約150年前の文久年間(1861～1864年)に、当時の箱(函)館を代表する遊郭「武蔵野楼」の2階屋上部分に立派

な庭園がつけられていました。2基の灯籠や池、橋、石組、飛石、あるいは花木が植栽され、本格的な日本庭園の趣を成すものでした。当時の日本を代表する商都、箱(函)館には21軒もの遊郭があったと言われていいます。おそらく武蔵野楼の屋上庭園は他の遊郭と差別化し、人を魅きつけるためにつくられたものと思われます。

農大に因んだ逸話もあります。明治2年5月11日、新政府軍による箱館総攻撃を翌日にひかえ、農大の創設者である榎本武揚ら箱館政府(旧幕府軍)の幹部たちが武蔵野楼で別杯を交わしたという史実が残されています。榎本武揚も、この屋上庭園を見て日本の行く末を案じ、感傷に浸ったのではないのでしょうか。



箱館「武蔵野楼」の全景 市立函館図書館提供



箱館豊川町武蔵野三階造全盛之図 市立函館図書館提供  
※点線部が屋上庭園

## 最古の室内庭園

明治22（1889）年に増築された横浜居留地にあったグランドホテル内の300人収容のバンケットルーム（宴会場）に壮大な室内庭園が設けられていました。

写真で見る限り、植物の植替えは行われていたとしても、一時的な装飾としてではなく、永続性のある庭園として整備されたものと思われる。



横浜グランドホテルのバンケットルームの室内庭園 横浜開港資料館所蔵

## 花壇 はじめてものがたり

花壇という、近年になり、欧米から移入されたものと思われがちですが、日本でも相当古い時代から庭園の一面に花壇的空間がつくられていたことが解ってきました。

### 花壇という言葉の起源

1700年頃の江戸時代にはすでに『花壇綱目』や『花壇地錦抄』など花壇を題名とした本が書かれており、それ以前に花壇という言葉が存在



現在の銀閣寺の花壇「仙草壇」

していたことが分かります。

## 1100年頃に描かれた絵巻物にも花壇らしい空間が

室町時代以前に描かれた『法然上人絵伝』という絵巻物に、小石で囲ったところや間垣で仕切られたところに草花や花木が植栽されている様子が書かれており、既に、その頃から花壇的空間がつくられていたことが伺われます。

### 花壇の原型「花段」が銀閣寺に

文明5（1473）年につくられた銀閣寺に当時は「花段」と呼ばれ、花壇の原型に当たるものであったと言われています。ボタンを観賞するために土を盛り上げ土留めをして水はけを良くするために花壇的空間がつくられていました。現在の銀閣寺にも「仙草壇」という花壇的空間があります。

### 再現された越前朝倉の主城「一乗谷館」遺跡の花壇

朝倉義景館は1558年頃につくられたもので当時の資料から忠実に再現された花壇は、切石などで四辺を囲み、中央に管理用通路とみられる自然石による踏石が敷かれています。土壌中に含まれていた花粉分析の結果からキク科、ユリ科、アブラナ科の花が植栽されていたと推測されています。

### 江戸城の一面にも「御花島」が

江戸時代初期に描かれた江戸図屏風には、土堀に囲まれた「御花島」と呼ばれる花壇的空間



再現された一乗谷館の花壇

があり、ツバキやサクラソウ、ユリ、キク、ナデシコが植栽されている様子が描かれています。

## 街路樹 はじめてものがたり

今、街中で当り前に見られる街路樹ですが、その起源には諸説あります。慶応3（1867）年横浜の馬車道にマツとヤナギが、明治3年（1870）年東京の新島原・根津門前の道路中央にサクラが、明治5（1872）年横浜の海岸通にマツとヤナギが、明治6（1874）年東京の銀座煉瓦街にマツの間にサクラとカエデが、珍しいものでは明治8（1876）年皇居のお堀端にアラビアゴムノキが植栽されたという記録もあります。

### 銀座のヤナギ

あまり知られていないことですが、明治の元勳「大隈重信」は銀座煉瓦街の建設も主導し、園芸全般に造詣が深かったこともあり、マツ、サクラ、カエデを植栽した街路樹誕生にも関わったと言われています。

銀座は埋立地であったこともあり、マツとサクラはうまく根付くことなく枯れてしまい、その代りに植えられたのが、後に銀座のシンボル

になったヤナギです。明治16（1884）年には、ほぼ全てがヤナギになったと言われています。大正12（1923）年の関東大震災で銀座煉瓦街もろともヤナギの街路樹も焼失しました。その後、銀座のヤナギの復活を望む人々の声を受け、二代目、三代目と復活を遂げてきました。その情景を西条八十が大正10（1921）年「昔、恋しい銀座のヤナギ」、昭和7（1932）年に「植えてうれしい銀座のヤナギ」と歌ったのは、つとに有名です。

### イチョウ並木の前身は壮麗なブルーバールが

現在、イチョウ並木で有名な横浜日本大通りには、明治12（1879）年、イギリス人のプラントンが設計した、中央に幅12mの車道がそれをはさみ3mずつの歩道が、さらに両側に幅9mのまるで庭園のような植樹帯の都合幅36mに及ぶ、いまだかつて日本では見られなかった壮麗な、まさにブルーバール（パリの凱旋門に見られるような並木や植樹帯を伴った大遊歩道）が全長500mにも及び計画されていました。残念ながら大正12（1923）年の関東大震災で壊滅的な打撃を受け、現在のイチョウ並木に替えられまし



壮麗な横浜日本大通りのブルーバール。（現在のイチョウ並木が貧弱に思える） 横浜開港資料館所蔵

た。できることなら、当時の壮麗なブルーバールを、あの場所に再現したいものです。

## 芝生 はじめてものがたり

わが国でも相当古い時代から庭園等に芝生が使われていたことは間違いありません。ただし十分な調査が行われておらず、その起源は定かではありません。

公園では、明治3（1870）年に居留民の利用を対象につくられた初めての洋式公園である横浜・山手公園に大規模に芝生地が設けられたのが始めてであり、おそらく冬枯れする日本芝（ノシバかコウライシバ）が用いられたものと思われる。

山手公園内には、ローンテニスコートも設けられ、少なくとも明治23（1890）年には、イギリスから西洋芝の種子等が輸入され、日本初の暖地における常緑芝生が出現したものと思われる。

慶応3（1867）年に開設された横浜の根岸競馬場のオーバルコース内に明治39（1906）年に9ホールの日本初の芝生のゴルフ場が整備されました。ゴルフ場としては日本で3番目のもの

ですが、前2者が砂で固めたゴルフ場であり、今、見られるような芝生のゴルフ場のはじめてが、ここです。

## 花と緑のグローバル企業 『横浜植木』

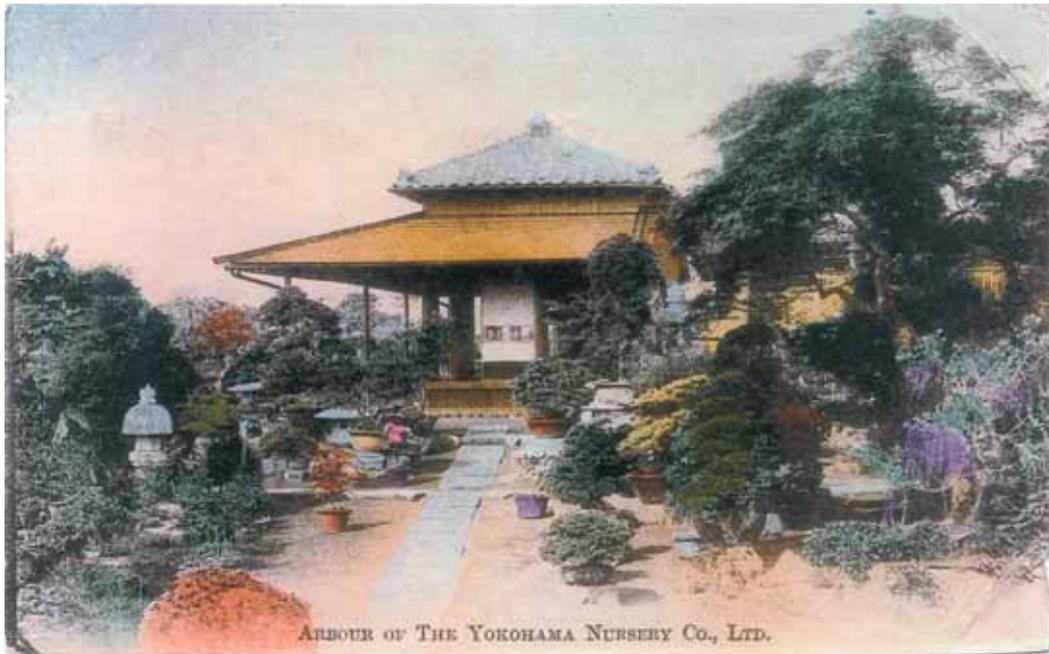
明治23（1890）年に創設された『横浜植木』は、海外向けに英文の園芸・造園資材のカタログを作成するなど海外取引にも力を注ぎ、園芸種苗の輸出入の拠点としての機能も果していました。

自社内の庭は手入れが良く行届き、多くの市民が植木や庭の鑑賞に訪れ、まさに公園的役割も果していました。また、国内外向けの多くの品種の育苗を兼ねた「菖蒲園」なども開設し、広く市民にも開放され、名所にもなっていました。

まさに当時の横浜植木は黎明期の近代園芸・造園事業の牽引者でした。進取の気象に富み、ワールドワイドなビジネスを展開していた一方、市民に憩いの場を提供するなど、大きく社会貢献していたことは驚嘆に値します。



開園間もない山手公園 明治4（1871）年  
横浜開港資料館所蔵



横浜植木の庭園兼植木園場 横浜開港資料館所蔵



横浜植木の磯子「菖蒲園」 横浜開港資料館所蔵

## おわりに

今回の企画展示では、これまであまり知られていなかった黎明期における花や緑による空間づくりのトピックス的事象の一端を紹介したに過ぎません。

今後、また機会をつくり、新たな情報を補完して、この種の企画展示を改めて開催したいと

考えています。

なお、もう少し体系的に、また幅広く、今回の企画展示の内容を理解したい方には、6月に開催予定の東京農大オープンカレッジ講座『花ひらき、美しく舞う緑の「造園文化」—江戸から平成を彩る環境芸技—』の聴講をお勧めします。

(文責 近藤三雄)

講座番号  
C021

## 花ひらき、美しく舞う緑の「造園文化」 —江戸から平成を彩る環境芸技—

### 講座講師・内容

近藤三雄 [地域環境科学部造園科学科教授]  
平野正裕 [横浜開港資料館主任調査研究員]

濱野周泰 [地域環境科学部造園科学科教授]  
金子忠一 [同 教授]  
服部 勉 [同 准教授]

今、日本に求められているのは「低炭素社会の実現」と「瑞々しい日本の情緒にあふれる和風モダンな街づくり」です。そのためには、これまで以上に造園の知恵と技術が必要となります。

本講座では、江戸もしくはそれ以前に、その起源を見る花や緑、造園に係る逸話（歴史的秘話）について、おもしろ、おかしくをモットーに語り、それらを手本に、まさに温故知新、明日の日本の街づくりが、いかにあるべきかについて展望します。

### カリキュラム

#### ① 6/12 (土)

10:00～12:00…江戸・明治に見る都市緑花文化の発祥、その歴史的秘話（近藤）  
14:00～16:00…文明開化の地「ヨコハマ」に見る花と緑のおもしろ物語（平野）

#### ② 6/19 (土)

10:00～12:00…日本を彩ってきた桜などの樹芸文化から樹木医学まで（濱野）  
14:00～16:00…江戸から今、明日を彩る珠玉の庭園文化、その魅力（服部）

#### ③ 6/26 (土)

10:00～12:00…文明開化の象徴、花開く公園緑地、昨日、今日、明日（金子）  
14:00～16:00…21世紀の輝く都市緑花文化のために、その知恵とビジネスチャンス（近藤）

### 詳細

会場：世田谷キャンパス 1号館 4階メディアホール

受講料：15,000円（教材費3,000円含む）

定員：100名

テキスト：各講座時に毎回資料配布。「東京農業大学造園科学科編：「造園力」で地球を庭に 東京農業大学出版会」（1,500円）を配布

申込締切：6/4（金）定員になり次第締切となります。

※講座内容、日程は変更になる場合があります。

### 受講の申込み方法

電話とインターネットによる受付となります。FAX・E-mail等でのお申し込みはできません。

受付開始日 3月10日（水）9:00～（電話・インターネットとも）

電話 03-5477-2562（9:00～16:00）

URL <http://www.nodai.ac.jp/extension/>

**※上記の講座は2010年度の講座のため、既に終了しております。**

### これからの展示

#### ■常設展

「稲に聞く」リニューアル展示

2010年3月26日（金）～

#### ■特別展

教育GP「山村再生プロジェクト写真展」

2010年5月12日（木）～6月13日（日）

「エミュー」展

2010年6月18日（金）～9月12日（日）